

平成22年 6 月 19 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007 ～ 2009
 課題番号： 19520387
 研究課題名（和文）
 言語行動としての広義引用表現の研究
 研究課題名（英文）
 Research on quoting expressions broadly defined as linguistic behavior
 研究代表者
 高崎 みどり （ TAKASAKI MIDORI ）
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
 研究者番号： 60096237

研究成果の概要（和文）：

本研究は、文章・談話の中の引用表現について、その実態を明らかにし、分析を施すことを目的とした研究である。扱ったデータは雑談、目的をもった会話、随筆等と多岐に渡る。引用表現について、文レベルでは扱えなかった諸現象に注目し、話し手および書き手の言語行動の戦略的所産として捉え直すことで、引用表現研究の新たな研究の可能性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to make a thorough analysis on the quotation used in the written Japanese sentences and spoken Japanese sentences. It is because people often use quite different expressions in the spoken sentences. We have collected many kinds of sentences of conversation, speech, essays, and so on. We paid attention to the cases which appear only in the spoken expressions and analyzed them from the view point that these sentences are the outcome of strategic action of the speakers and writers. This approach opened a new possibility of research on the expression of the "Quotation".

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 総計 | 2,200,000 | 660,000 | 2,860,000 |

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：

キーワード：国語学、日本語学、著作権、言語行動、談話分析

1. 研究開始当初の背景

引用という行為は、文字言語であろうと音

声言語であろうと、極めて日常的になされる行為である。日常的であるがゆえに、例えば、

会話において、引用という現象が頻繁にみられることは意識されにくい。

それでは、いわゆる引用形式を指標とせず、引用という現象を話し手および書き手の「言語行動」と捉えた時に、どのような現象が引用として浮かび上がってくるのだろうか。また、従来の引用研究においては、書きことばを対象とした研究が多く、会話を対象にした研究は十分とはいえない。会話参加者の相互行為が求められる会話場面において、引用表現はどのように用いられているのだろうか。当該場面以外に成立した発話の再掲・再生産といった意味合いを超えて、どのような機能を獲得するのであるか。

以上のような問題意識をもって引用研究を開始した。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の5点である。

(1) 引用に関わる従来の研究を整理し、広義引用表現として分析を行う意義を示す。と同時に、引用を引用行動の所産として捉えることで拓がる研究の可能性を示す。

(2) 書きことば・話しことばを問わず様々なデータ・実例の中にみられる引用表現について、そのバリエーションの多様性を示す。

(3) データの種別を超えて、引用という現象を捉えるための基準を考案する。

(4) 日本語教育の領域における引用表現の研究を概観し、中上級の日本語学習者の作文に見られた引用表現についての観察・記述を行う。

(5) 従来の引用マーカー（例えば「と」や「って」）とは異なる新しい引用マーカーについて分析を加える。

3. 研究の方法

様々な状況下でなされた独話・対話の中に引用表現を観察することを目的に、平成19年度、20年度では様々な談話データを収集した。

(1) 音声言語のデータ

様々な状況下でなされた独話・対話のデータを収集した。収集データの特徴は以下に挙げる通りである。なお、会話協力者の属性の具体的な記述は省略するが、会話協力者の年齢は10代から50代までと幅広く設定した。

① 独話データ…講演

② 対話データ 課題解決型会話

(与えられた課題の解決を目的とする会話)
意見交流型会話

(テーマについて意見を交わす会話)

雑談会話

(話すテーマが特に決まっていない会話)

面談会話

(教員と学生の面談会話)

③ 授業データ…教授場面

データ収集に際しては、ICレコーダーとDVDレコーダーを用いて録音・録画を行った。文字化にあたってはExcelを用いた。

(2) 文字言語のデータ

文字言語のデータとしては、随筆テキストをデータとして用いた（以下、「随筆データ」と呼ぶ）。随筆データは、『文藝春秋』1999年4月号～2003年8月号の「巻頭随筆」500編（延べ500人の書き手）から成る。

なお、随筆データの作成は、平成15・16年度科学研究費補助金・基盤研究C「日本語の談話における結束性の研究」（研究代表：高崎みどり）の研究成果である。

4. 研究成果

(1) 引用研究の整理と本研究の意義

まず、引用研究を行う上で、基礎的研究となる書きことばの研究について述べ、その後、話しことばを対象とした研究の成果をまとめた。

研究を整理した結果、従来の引用マーカーである「と」や「って」に加え、新しい引用マーカー（例えば発話末の「みたいな」や、引用形式「と」を内在とする「というか」）にも注目が集まりつつあることがわかった。ただ、形式的特徴を始発とした研究は進んでいるが、なぜ、引用をしなければならないのか、といった行為としての引用に迫る研究は管見のところ見当たらなかった。

そこで、引用を行為として捉えることを提案し、具体的な形式を指標とせずとも、引用的行為として捉えられる現象を、幅広く観察していくことの意義を示した。

【報告書】

第1章「引用表現とは何か」

第2章「引用についての先行研究概観」

(2) 引用表現のバリエーション

① 談話資料における引用表現の多様性

談話資料にみる引用表現の実態を、引用形式の形態や、引用内容やその集積がトピックを構成する場合に注目して観察した。

分析の結果、談話の中で出来事や主張を語る方法としての引用形式、という捉え方を示した。ここでは、過去の出来事の再現を目的とするトピックを「ストーリー的トピック」、

何らかの主張を述べることを目的とするトピックを「主張的トピック」とし、それぞれタイプの異なるトピックを展開させるにあたっての引用表現のふりまをみた。

引用形式の形態としては、大きく「ト言ウ」系と「ト思ウ」系を考えた。また、基本形態が他の要素と複合することで、引用の働きが形骸化し、引用以外の機能を獲得することを示した。以上が、談話データにおける引用表現のバリエーションを示した研究である。

② 書きことばと話しことばの比較において

続いて、書きことばと話しことばを比較し、両者に共通する部分ならびに異なる部分について述べた研究の成果についてまとめる。ここでは、随筆テキストを中心にし、引用形式「と」をめぐる、談話を比較するという視点で分析を行っている。

分析の結果、文章においては、書き手と読み手が同一の時空間を共有していないため、いかにして臨場感や読みやすさ、分かりやすさなどの折り合いをつけるかが大きな課題となっており、それに向けての様々な引用方法の工夫が見られた。一方、談話は、声色や口調、イントネーションなど音声を伴い、生き生きとした描写を行うために引用表現が用いられていた。と同時に、「場」の共有を前提とすることから、聞き手への配慮と関連した引用表現も確認された。

また、文章・談話を問わず、引用部分においては、発信者の叙述内容に対する解釈の仕方が反映され、判断や意図が加えられていることが分かった。この手法は、主として婉曲化や臆化を狙っており、これは、日本語の言語的・文化的特性とされる曖昧さや直接的な表現を忌避する手段ともいえる。とくに談話では、その出所を抽象化して一般化する、また特定の人物の発話を一般的な人々の見方や考え方にすりかえ、「って」で文末を終える例が多く見られた。これは談話における引用は文章に比べてゆるく、出所を具体的に示すことは求められない傾向に因るものと考えられる。一方、文章では、もとの発話を大幅に変形し、引用者の解釈した内容に変形して簡潔にまとめ、引用の体裁をとってとりこまれることが多かった。

【報告書】

第3章「自然談話資料における引用表現の実態と分析」

第4章「文章と談話における引用表現の比較」

(3) 引用という現象を捉えるための手立て

(2) ①で示した「ストーリー的トピック」と「主張的トピック」の観点で、引用表現をとらえると、談話・文章といった異なりを超

えて、同一観点から分析を行えることを示した。

まず、「ストーリー的トピック」において引用表現は、生き生きとした場面の再現として多用される半面、婉曲のための「というか」等、形式的使用もバラエティが豊富である。特に談話においては引用の始発が不明であることも少なくなく、二重の引用も頻出する。「主張的トピック」では、主張の確からしさの根拠として、権威あるものを引用したり、主張の和らげに形式的に使用されたりする。また、架空のテキストの引用や、直前の自己言表の引用も多用される。いずれも、引用がただの引用にとどまらず、中心的機能を拡張して、多目的に使用されている実態が明らかになったといえる。

【報告書】

第5章「同種の話題という観点からしてみた、テキスト・談話における引用表現について」

(4) 日本語教育における引用表現

まず、日本語教育に資することを目的とした引用表現研究を概観した。その上で、日本語教授場面に用いられる引用表現(教員の発話)の分析と、中上級レベルの学習者が作文において使用した引用表現について分析を行った。

教授場面における引用表現の分析においては、一斉授業における教員の発話(一对多)と、学生と教員の面談場面における教員の発話(一对一)に注目した。

まず、一斉授業における教員の発話に注目したところ、その指導過程においては、直接引用と間接引用の両方が用いられていることがわかった。また、話しことば特有の引用マーカーである「って」に加え、「と」も適宜用いられており、書きことばの文体も確認することができた。その一方で、引用マーカー「って」「と」に後続する引用動詞を省略する発話もみられ、この点に関しては、談話的な特徴を見出すことができる。

さらに、授業場面に応じた引用の方策という視点から、引用表現を捉え直すと、教員が説明を行う場合は、分かりやすさに配慮し、学生たちの立場をふまえた話しことばの想定引用が多用されていた。一方、面談場面においては、学習者の発話を受け、その全体あるいは一部を「繰り返し」で引用することで、再度、学習者へturnを譲渡し、学習者の発話を引き出す方策が確認された。

続いて、学習者の作文を対象にした観察の結果を述べる。日本語能力試験1級レベルの学生については、文法的な誤りが若干あったものの、多様な引用の方策を身につけ、それを積極的に活用しようという努力が認められた。また、中上級の学習者においても、す

でに母語において基本的な引用の方策を習得しているものと考えられることから、基本的には日本語においてもそれを理解し、表現しようという姿勢を持っていることがうかがえた。

よって、「書くこと」における引用指導の中心は、そうした姿勢をより伸ばすために引用における文法的な項目に特化することが重要であると考えられる。

【報告書】

第6章「日本語教育における引用表現」

(5) 新しい引用マーカー「みたいな」

大学生の話し合い場面を対象にし、発話末に現れる引用マーカー「みたいな」の分析を行った。

分析の結果、発話末の「みたいな」は、自身の考えや意見を、臨場感をもってわかりやすく説明するために効果的に使用されていることがわかった。この使用における「みたいな」は、効果的な課題解決を意図して発せられたものと捉えることができる。

また、発話末に「みたいな」を置くことで、先行内容に対する距離感が生じ、場の雰囲気や考慮すれば言いにくいと思われる内容についても提示を許すといった、コミュニケーション上の伝達効果が認められた。

さらに、「って」との置き換え可能性を考えることで、「みたいな」には、引用部分の再現性やその適切性が、それほど問われないことが示された。この厳密性を問わない「みたいな」の性質が、発話提示に関する精神的な負担を軽減すると考えられる。確かに、提示情報が不確実であっても「みたいな」で終わらすことによって、その提示責任を回避することができるし、先行意見に対して反論を提示する際も、「みたいな」で否定的な意見を曖昧にすることができる。

また、引用マーカーである以上、「みたいな」は、話し手・聞き手・第三者の誰の発話を引いてもよく、話し手は「みたいな」を用いて、現発話にいろいろな人の“声”を取り込むことができる。そして、引用部分の再現性、適切性はそれほど問われないことより、「って」よりも、想定場面における架空の発言を導きやすく、会話を活性化させるためにも「みたいな」は効果的に使用されていることが推察された。

【報告書】

第7章「コミュニケーションストラテジーとしての発話末の「みたいな」—引用表現「って」との比較を通して」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①高崎みどり(2010)「自然談話資料における引用表現の実態と分析」『人文科学研究』6 pp. 187-198 お茶の水女子大学 査読なし

②高崎みどり(2010)「テキスト・談話における引用表現」『大学院教育改革支援プログラム 日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成 平成21年度活動報告書 海外教育派遣事業編』pp. 236-244 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 査読なし

〔学会発表〕(計3件)

①高崎みどり(2009)「自然談話における引用表現の実態と分析」第46回表現学会全国大会 (於: 山口大学 6月6日)

②星野祐子(2009)「大学生による課題解決型話し合いにおける“繰り返し”の機能」第46回表現学会全国大会 (於: 山口大学 6月6日)

③高崎みどり(2009)「テキスト・談話における引用表現について」北京日本学研究センター・お茶大共同ゼミ (於: 北京日本学研究センター 10月18日)

〔図書〕(計1件)

①高崎みどり研究代表(2010)『平成29・20・21年度科学研究費・基盤研究(C)報告書 言語行動としての引用表現の研究』(印刷: 流通経済大学出版社) 総ページ134p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高崎 みどり (TAKASAKI MIDORI)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号: 60096237

(2) 研究分担者

杉本 明子 (SUGIMOTO AKIKO)

(H19年度まで)

明星大学・人文学部 心理・教育学科・准教授

研究者番号: 30311145

佐々木 泰子 (SASAKI YASUKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号: 20251689

立川 和美 (TACHIKAWA KAZUMI)

流通経済大学・社会学部・准教授
研究者番号：70418888

(3) 研究協力者

星野 祐子 (HOSHINO YUKO)
都留文科大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：70564110